

国際福祉と伝統組織

--- ネパールの伝統組織と異文化間ソーシャルワーク ---

野 崎 泰 志

はじめに

アジア諸国との自由貿易協定が促進され、フィリピンから看護・介護の人材が日本にもやってくるようになった。タイはタイ式マッサージ師を日本へ送ることを協議の中で正式に表明し、日本盲人会連合などが反対の声を上げている。いずれにしても、若年労働者の不足によって、今後の超高齢化社会を迎えるに当たって、文化を異にする海外の様々な働き手が日本に大量にやってくるのは間違いない。

先進諸国の移民政策は、多くの定住外国人労働者を招き入れることによって、労働力不足に対応するものであった。その一つの領域が医療・福祉の現場であるが、忘れられがちなのは、そうして入って来た移民もまた高齢化してゆき、更に福祉人材が必要になるというジレンマである。ここに、移民労働者自身の福祉をめぐる新たな福祉課題が発生する。石河はこれを新たな国際福祉の一領域とみなし、「内なる国際化をめぐる社会福祉」として、日本における異文化間ソーシャルワークという新たな領域の重要性を指摘している⁽¹⁾。

既に中部地区には、ブラジル、ペルーなどからの多くの工場労働者が働いており、韓国、中国からもたくさん来ている。留学生も増え、卒業後日本に就職する者、国際結婚する者など、様々な定住パターンが見受けられる。また、IT先進国のインドからは、IT技術者がまとまって日本で働くようになり、東京都の江東区にはインド人コミュニティが形成され、地元の人々と様々な文化交流を繰り広げている。また、ネパール人も留学生がおよそ150人を超え、関東や東海を中心に6,000名を越える規模の就労となっている。そして、在日ネパール人会や在日ネパール人留学生協会なども次々に組織されつつあり、⁽²⁾日本ネパール協会もそれらと提携して種々の事業を行うまでになっている。

内なる国際化をめぐる社会福祉を考える場合、こうした外国人が自らのコミュニティをどのようにして形成していくのかを理解することは重要である。本稿では、ネパール社会に古くから存在するグティの形成過程と現代における姿を概観して、ネパールの人々のコミュニティの原型

について考察し、現地における社会開発プログラムや日本における異文化間ソーシャルワークに資することを目的とする。

1 ネパールの伝統的社会組織——クロとディクリ

ネパールにおいて伝統的な社会組織として知られているものに、クロやディクリやグティがある。クロは灌漑用水を共同で利用する伝統的な灌漑共同体で、利用料を払わないと差し押さえたりする力を持ち、政府管理の灌漑組織やお仕着せの水利組合よりは効率も良く、援助関係者や開発研究者の間では近年評価されつつある。規模の大きなものは時にトゥロ・クロと呼ばれる。

ディクリは主としてタカリ・グルン・まれにはネワールなどの人々の間で見られる自生的な金融機構であり、日本の無尽や頼母子構と同義である。近年、1990年の民主革命以降、株式マーケットの登場等、市場経済への急傾斜に伴って、これらの伝統的な金融も装いを変えて投資集団化しつつあり、特にカリガンダギ沿いの伝統的な商業民族であるタカリや、カトマンズ盆地を故地とする商才に長けたネワールのそれらは活発な活動を始めている。例えば、ムスタン地方の特産であるリンゴは輸送の手段に乏しく、従来は加工製品の地位に甘んじていたが、タカリ達がヘリコプターのチャーターで平野部へ降ろしはじめ、今はカトマンズの市場でも見かけることができる。カシミールから陸路運ばれてくるリンゴと、まだ価格的には太刀打ちできないようであるが、とにかくこの光景は以前には見られなかったものである。

ディクリは時に巨額の資金運用を行う力を持ち、信用組合的な役割を果たしているが、時にはまたバブル状態に簡単に陥るなど、近代的経済制度とのマッチングが課題のようである⁽²⁾。伝統的な経済観念・人的信用ネットワークによるだけでは、近代的経済制度の中では逸脱してしまう例と言えよう。

2 ネパールの NGO の歴史と現状

近代ネパールにおける社会事業活動は、1951年の王政復古革命以前には宗教的慈善事業以外ではただ一つしかない。それはガンディー思想を核とする“Shree Chandra Kamdhenu Charkha Pracharak Maha-guthi”で、1926年の創立であったが、ラナ将軍軍政権の迫害で創立者のTulsi Meher氏は反逆者としてインドへ追放された。王政復古革命後、同氏の帰国に伴い、“Nepali Gandhi Smarik Nidhi”が創立され、この両者は1972年に“Nepal Charkha Pracharak Gandhi Smarik Maha-guthi”に統一され現在にいたっている。このネパール近代史上最初のNGOに、「Guthi」の名前がついている事は注目に値する。

これ以降、Paropakar Shamsthan (1947), Nepal Family Planning Association (1959), Nepal Red Cross Society (1963), Nepal Children's Association (1964) など、1960年代までに15団体ほどしか組織されていない。そして、社会事業団体を統括する中央団体として、

Social Service National Coordination Council (SSNCC) が 1977 年に特別立法によって設立され、1990 年の民主革命後、これが Social Welfare Council (SWC) と改名され、教育文化社会福祉省に吸収されるまで、約 200 団体のネパールの NGO と、約 50 団体の国際 NGO が登録されていた。SWC の権限縮小と開放的政策は、1992 年施行の「社会福祉法 1992 年」によって位置付けられ、約 60 団体の国際 NGO・約 16,000 団体のローカル NGO が登録されて今日に至っている。

3 歴史の中のグティ

Jagdish Ghimire らは「ネパールの NGO 政策に関する一考察」と云う、現在のネパールの NGO 活動を総合的に検討した論文の冒頭でその歴史について以下のように叙述を始めている⁽³⁾。

「ネパールにおける社会組織の最初の形態は、グティつまりトラストに見いだすことができ、そういった組織はその創始者の家族やコミュニティー、とりわけ宗教に関わる目的から設立された。紀元前 500 年前後まで遡るネパールの伝統的なグティの歴史は、1951 年の革命の後、急速な終焉を迎えたが、今日でも、政府管掌グティ・非課税グティ・私設グティは数多く活躍している。それらは活動内容がオープンであり、意思決定過程で受益者（グティ成員）が参加していること、また受益者がグティに必ず貢献するようになっている事から、積極的に社会に貢献し今でも存続している。」

ネパールではほとんどの学校や福祉施設に何らかのグティが関わっている。言葉の定義を少し緩めれば、その現代的な姿が NGO ということも言えなくはないし、事実幾つかの NGO はグティを名乗っている。彼らにとって空気のようなグティの存在はほとんど外国人には知られていないし、知られていても余りに多義的な存在であるグティの一面的な理解が多い。また、ほとんどがクリスチャンである欧米の国際 NGO や政府の開発従事者は宗教的対立の顕在化をさせてグティに触れないままで来た。従って第一に、この存在の正確な理解はネパールにおける開発協力事業にとって不可欠であり、第二に、ネパールの人々のグティに対する姿勢や熱意から学べるものは多く、どんな場所で Community Development や Self-Help Organization を展開するにしても、数千年に渡るグティの歴史は大きな社会的・文化的要因として無視できない。

4 グティの名称と起源

“Guthi” はサンスクリット語の “Gosthi” を起源とし、その意味は「society or association」とされている。それが、パーリー語やプラクリット語では “Gothi” となり後に、“Guthi” または「Guth」に転訛したとされている⁽⁴⁾。

正確には、「牛舎」を意味する「gosth」が「集会の場」と云う意味に転じ、それが「assembly, meeting, society, association, family connections, partnership, fellowship」を表すようになり、さらには「conversation, discourse, dialogue」の意味をも包含するようになった。そして「gosti」はその女性名詞である⁽⁵⁾。

ネパール経済史の記念碑的大著『ネパールの土地所有と税制』において、M. C. Regmi は経済史の立場から包括的にグティに考察を加えているがその起源について以下のように述べている⁽⁶⁾。

「グティは、寺院・修道院・学校・病院・孤児院・救貧院等の宗教的 且つ慈善的施設を設立・維持する為の、土地又はその他の形の寄付にその起源を持っている。」

これは寄付された土地の農作物等によって上記の事業を維持するもので、歴史上、ネパールに限らず多くの地域において同様の形態は見いだせると云う。エジプト・イラク・イラン・シリア・インド他のモスリム社会の「vaqf」システム、ヒンズー社会の「dharmada 又は devottar」、中世ヨーロッパの「mortmain」等、歴史上に多くの類例がある。これらは宗教的行為の一つとして「功德」を積むと云う共通の精神に支えられた、初源的な意味での慈善団体と言え、ネパールでは歴史上これが独自の発展を遂げた。

紀元前 5 世紀前後から「gosthi」の存在は知られているが、ネパールでは歴史資料が紀元五世紀以降に限られる。まず、リッチャビ王朝（5 世紀中葉～9 世紀）の初期、アンシュヴァルマー王（605～621）が宗教的行事の執行管理機関「gosthi」を手厚く保護したと言われている。この王以降、ヴィシュヌ派からバシュパティ派が主流となったが、歴代の王は仏教も平等に保護した。ナレンドラ・デビ王（740～777）が「gosthi」をパタン（現カトマンズ市の一部）に寄進した記録がある。マッラ王朝でもこのサンスクリット語がつかわれている。

現在のゴルカ王朝がカトマンズ盆地を制圧した時期（1768～69）から、同盆地においてグティという名称が広範に使われるようになった。征服王のプリティビ・ナラヤン・シャハ王がカトマンズのゴラカナート寺院の為にグティを設けたのが最初で、しかも従来はこの一種のトラストの役員会を意味していたのを寄進地そのものの意味に使うようになった（以下では、組織としての意味ではグティ、その土地を指す場合はグティ地とする）。同様のものにたいして、次の王のシンハ・プラッタップ・シャハ王は、征服地東部ネパールでグティを使わず、「ビルタ」という旧来のその土地での名称を使っている。ゴルカ王朝以前は西部ネパールでもグティという名称はほとんどない。ゴルカ王朝が現在のネパールの版図を徐々に確立してゆくその後の過程で、この名称は全国に徐々に行きわたったと見られる。

5 グティの成立理由 ― 政治・経済的背景

宗教的な目的がグティ地の寄進の動機であるのは疑いがない。ヒンズーの伝統では、「土地を寄進すれば天国で 60,000 年生きられる」とされているし、貧窮者や巡礼に食事を供する場所である「sadavarta」を寄進すれば七世代に渡ってその一族は魂の救済を得るとされている。

また 1792～93 年のネパール清国戦争では、政府が戦勝を祈る祈祷の為にグティを設け、1854～56 年の第二次ネパール・チベット戦争でも将軍が出征前に個人で同様なグティを設けた例がある。一方、経済的な背景も明らかに見られ、グティ地は一度寄進されると永久に解消される事がないので、相続（古くから均分相続）による土地の細分化を防ぐことができる。宗教的活動や慈善事業に収益の一部（現在でも法定小作料程度で 17% から 20% 程度）を回して残りは一族で維持でき、土地の集中による経済的保証が得られた。また、政治的には、支配者の交代又は政治的失脚によって引き起こされる土地の没収と再配分に際して、グティ地はその対象外とされていたので、寄進者一族にとって生命保険のような機能も果たした。こうして中世ネパールのグティはラナ将軍家専制時代（1846～1951）に至るまで、土地所有貴族階級の特権として封建体制の一つの柱としてそれを支えて来た。

家よりも寺院が多いと言われた（18 世紀末の英国人の記録）ほど、現在でもカトマンズに無数の寺院が存在するのは、王族や貴族、隣組から個人に至るまで多くの人々（とりわけ 11 世紀以降のネワール族）が 1500 年以上にわたって大小のグティを形成してきたからである。聖なる牛や猿を扶養するグティもあり、カトマンズ盆地内の西端にある有名なスワヤンブ寺院に寄生する猿の群れは野生ではなく、専用のグティによって食糧が供給されている。

一例を上げれば、カトマンズにあるヒンズーの聖地、パシュパティナート寺院は 1964 年時点で約 30ha の寄進地を持っている。稲に換算してこれだけで 344.3 石の維持費が出る。現在の平均米価（19 ルピー/kg）で、約 3,361,000 ルピー（約 672 万円）で、これは約 100 人分の高校教師の平均年収に相当する。現在の日本の感覚に直せば、およそ 4～5 億円とみなせる。1934 年に起きたカトマンズの大地震で市街はほぼ全滅する被害を受けたが、時のラナ政権は諸外国から申し出られた災害救援の援助をすべて断り、このパシュパティナート寺院他の主要なグティ資産で災害復興を果たし、今日のカトマンズ市街が再建されている。また、このパシュパティナート寺院の一つのグティが、カトマンズ北方の山岳地帯に広大な森林を所有しており、グティによる歴代の管理によって保存され、今日のカトマンズ市の水源地となっている。

6 慈善事業

グティはもともと寺院に付属する機能としてのサービスであった。従って、巡礼者の宿坊、食事、飲料水、路傍の休憩所などを提供した。近代になるにつれてその範囲が広がり剰余の食料を

一般の孤児、病人、老人、貧窮者に供給するようになった。その最初の記録は、1834 年からある⁽⁷⁾。独身の視覚障害者が寺院内に居住して清掃にあたったりする例がよくあるが、これも現代風に言えば障害者福祉の役割を担っている事になる。

こうした宗教活動と分離された形での福祉事業が盛んになるのは、ラナ専制時代（1846～1951）で、1911 年のトリブバン王の戴冠式を記念して、タライ平野の各地（モラン・サプタリ・ビルガンジ・タウリハワ・パンケなど）に孤児院・貧窮院が設置されたのはその代表である。ラナ政権も 1914 年に寡婦・児童・老人の為の二つの慈善組織「Benevolent Society」「Charitable Society」を設立したが、これらは一定の階層以上に受益者を限定し、結局、ラナ体制を補完するものであった。この時期、ごくわずかに、橋の修理・灌漑施設・上水道施設などの公共施設がグティによって維持された。

7 現代におけるグティの法的背景

1951 年にラナ専制体制が崩壊した後土地改革が進められ、土地保有の上限が定められた結果、人々のグティへの熱意は褪めた。しかしながら逆に、純粋に社会事業を目的とするグティがこの時期以降も設置されており、それらは例えば学校や病院建設などに力を注いでいる。そして、政府にとっての主要な課題は、残された膨大なグティ資産を公共の福祉の為にどのように活用するかと云うことであった。こうして、1963 年にグティ・コミッションが組織され、『土地法 1964 年』に伴って、『グティ登録法 1963 年』『グティ公団法 1964 年』が制定された。こうして、主要な寺院関係他のグティはすべてグティ公団所有とされ、これを Raj Guthi とした。

その『グティ登録法 1963 年』第一項では、以下のように寄付行為を定めた⁽⁸⁾。

「学校・病院その他の公共福祉施設をネパール国内において設立するか建設する目的でネパール王国政府に土地を請求するものがあれば、他の者に所属しない国有地があり、又その譲渡が他の者の利益を害さない限りにおいて政府から国有地の譲渡を受ける事ができる。」

『グティ公団法 1964 年』第一章第二項定義（f）では以下のように定義している⁽⁹⁾。

「寺院を維持し宗教的祭典・儀式・祭礼を祝うか、又は他のあらゆる宗教的又は慈善的目的の為に、寺院・休泊所・休憩所・宿舎・溜池・水槽・橋・学校・家屋・建造物・施設等を建設・運営・維持することを目的として、動産・不動産又は他の利益を生む基金の譲渡をその所有権を有する慈善家から受けた団体。」

『グティ公団法 1964 年』第一章第三項団体の設立第二条では以下のように性格を定めている⁽¹⁰⁾。

「この公団は自治権を有し公団組織は永続性を有し、全ての活動の為の独自の認印を所有し、自身の名において提訴でき又提訴の対象となる。」

宗教と未分化のままであるとは言え、紀元前からの伝統を継承しながら、ネパールにおける社会福祉政策の基盤となるグティがこうして 1960 年代に組織し直されたのである。

8 社会開発の立場からのグティの再評価

ネパール特有の土地制度の一部であり、ネワール族独自の伝統的宗教的紐帯であるグティの全体像をつかむ事は簡単ではない。経済学または経済史の観点からは土地所有形態に応じた課税システムの中で位置付けられ⁽¹¹⁾、また文化人類学の観点からはネワール族社会の宗教的儀礼組織或は社会階層化のシステムとして観察されて来た⁽¹²⁾。しかし 1960 年代の一連の土地改革に伴って、グティは近代的な意味における「トラスト」の性格を帯び公益法人的な役割を果たすようになっていく。政府グティがその体質からして活動的ではないことは事実であるが、民間グティは様々な場面で社会福祉事業や開発事業に関わっている。NGO として表立って活動するものはまだ少ないが、NGO でもよく観察すると基盤がグティであることが多い。例えば、土地の所有関係の問題でこの国の社会事業の深層構造の一端に触れることができる。

(事例一) ケディア眼科病院病棟増築プロジェクト

ビルガンジにあるこの病院に 100 ベットの病棟を増築した際に、その土地所有関係の複雑さが判明した。アジア眼科医療協力会としては全国的展開をしている NGO の Nepal Netra Jyoti Sanga (以下 NNJS) とプロジェクト契約を持っており、まずここと建築の相談をし了解を取った。土地は NNJS のものであるとの説明であったので、建築予定地の所有を証明する登記簿の提示を求めたところ、結局出てこない。やがて判明した事はその土地の所有をめぐる病院の経営団体であるケディア財団と対立が続いているという事であった。NNJS は全国十か所に眼科病院を持つ大規模なローカル NGO で、ここと協同事業を行っている国際 NGO は、ドイツ・スイス・アメリカ・日本・オランダ・カナダ・ノルウェー・フランスの八か国、九団体に上っている。それらの病院の土地はこのケディア眼科病院以外はすべて NNJS に登録されている。ところがケディア財団のみが土地を手放さないでいた。NNJS は自らの土地であると主張しケディア財団は渡さないという。双方との調整の後に、最終的に、広大なケディア財団の土地の内で病院が立地している部分だけを「病院所有」として再登録するという妥協が成立した。

その時点で土地登録の写しを見て判明したことは、ケディア財団は「グティ」としてこれらの土地を所有しているという事実であった。すなわち、病院や学校などの計画を持つケディア財団は、法的にはグティ公団法及び登録法によって認可された公益法人である。ネパールを代表する財閥の一つであるケディア家は、こうした形で各地において学校経営や病院経営を行い、社会的

還元を計っている。

(事例二) ネパール眼科病院と NNJS

カトマンズにあるネパール眼科病院と NNJS は別々の団体である。そしてこの両者は同じ敷地内の別々の建て物に別れている。その空き地に、筆者らは「点眼薬工場」を建設する計画を持っていた。その土地の実際の所有者が NNJS であるのかネパール眼科病院であるのかによって契約する相手が変わってくる。両者はそれぞれ土地は自分のものであると主張するので、書面による提示をもとめると、結局、土地はその両者のものではなく、両者が借地権を得ている「政府グティ」のものであった。ネパールを代表する全国レベルの NGO である NNJS も、そうしたグティから無償で借地権を与えられる事で活動できているのである。

(事例三) ネパール盲人福祉協会事務所建設

(社福) 東京ヘレンケラー協会がネパール盲人福祉協会の建て物の一部を新築した際に、その土地の所有者である「グティ」から建て物のデザインに対するクレームが付き、結局、敷地である寺院の景観を壊さないようデザインが替えられた。この土地はこの寺院を維持している「政府グティ」に属している。

9 グティの現代的意匠としての NGO

1926 年創立のネパール最初の NGO に、「Maha-guthi」(偉大なるグティの意)の名前が付けられている事からも推察できるように、ネパールの社会では伝統的に宗教的社会事業団体としてのグティが盛んであった。それが、1960 年代の土地改革を経て、政府・民間双方での公益団体として法的にも位置付けられ、以後、その精神は、1991 年の民主憲法と 1992 年の社会福祉法を経て、現在の NGO に受け継がれている。

伝統的社会にはそれぞれに息づいた知恵や技術があり、それらは彼らの生活世界のなかの重要な部分を占めている。NGO による開発協力がそれらへアクセスしやすいのは、人間同士のつながりと信頼、適切な規模によるプログラム、失敗を容易に修正できる態勢などの要素が、比較的整っているからであろう。ネパールにおけるディクリや大小のグティがどのように社会の中で機能しているのか、その脈脈にどのように開発をつなげていくのか、それを一定の手法として獲得してゆくことは、今後の社会開発において重要な意味を持つ事になる。

ネパール政府は、地域住民や NGO からの社会福祉等を目的とする正当な請求があれば、利用されていないグティ地の利用を許可する。外国からの援助案件に提供されるのはそうした土地が多い。グティによる土地所有・利用形態は、地域資源に対する集団的な権利としては「入会権」のそれに近く、「総有」の概念にほぼ等しい⁽¹³⁾。行政能力の問題もあって必ずしも公正な運用がなされない場合もあるが、しっかりした現地 NGO (トラストとしてのグティ) がこれを担っ

たケースでは比較的うまくいっているようである。こうしたネパールの伝統的な社会参加意識の脈に、いわゆる参加型開発の手法でうまくアプローチできれば、成果は大きく変わるものと思われる。

結語 異文化間ソーシャルワークの質の向上と国際福祉開発

ネパールのグティは一定の土地や森林などの資産を背景として経済力を蓄え、それを様々な社会事業に供して来た。その紐帯は、ネワール族などの地縁的、血縁的社会そのものにあった。近代においては、宗教的儀礼や活動から、こうした基礎をもったトラストとして形態を変えつつあり、更には、ローカルな NGO として形を変え活動している。

そして、海外におけるネパール人社会の中にも、同じような紐帯で結ばれた新しいディクリやグティが姿を変えながら形成されている。それは、留学生、就労ビザを持って働く者、居住地域を同じくする者など様々な情報資源を背景とした新しいコミュニティであり、その中にグティの紐帯が明らかに認められる。簡単には一枚岩にはならないが、無数のグティ的コミュニティの連鎖が、在日ネパール人社会の特徴である。

実際にも、オーバーステイの者を含めて、在日ネパール人への相談援助などもボランティアベースで行われおり、質の高い異文化間ソーシャルワークの必要性は高い。単に言葉や習慣を理解するだけでなく、異文化間ソーシャルワーカーとしての一定の研修や訓練が求められている。その際、ディクリやグティなどのような彼ら自身の文化に埋め込まれた社会的紐帯に繊細であることは、最低限必要なことであろうし、そうした訓練を受け経験を積んだ者が、開発途上国現地での開発協力の場面で有効な働きをすることは論を待たない。現に、日本で福祉従事者であったもので海外協力に従事するケースが最近徐々に増えている。日本の福祉現場でクライアントとの接し方を身につけた者は、途上国の現場でも人々に優しいという評価が高まっている。

自由貿易の影響で外国人労働者が増え、在日外国人に対するソーシャルワークのニーズが高まり、そこに国際福祉の新しい領域が広がろうとしている今、医療・福祉という生存の基本にかかわる部分で、足元から福祉の国際化が進行しつつある。そして、そこで求められる異文化間ソーシャルワーカーは、日本の足元であろうと、途上国現地であろうと、共に人々の生活福祉を支え得るコミュニティ・マネージャーとして、国際福祉開発の最前線に立つことになる。様々なエスニック・グループに対応できる、そうした異文化福祉人材の育成が内外において急務と言えよう。

注

- (1) 石河久美子『異文化間ソーシャルワーク 多文化共生社会をめざす新しい社会福祉実践』川島書店、2003年。
- (2) 水野正己「ネパールの金融講『ディクリ』」『アジア経済』第35巻第6号、1994年6月15日、アジア

経済研究所.

- (3) Ghimire, J., Acharya, N., Aryal, S., NGO Policy of Nepal, NGO Federation of Nepal, 1992, p.1.
- (4) Regmi, M. C., Land Tenure and Taxation in Nepal, volume 4., 1968. Second edition, Kathmandu, 1978, p. 631.
- (5) Monier-Williams, M., A Sanskrit-English Dictionary, London, 1899, Reprint, Delhi, 1993. and Böhrtlingk, O., und Roth, R., Sanskrit-Wörterbuch, St. Petersburg, 1855-75, Reprint, Delhi, 1990.
- (6) Regmi, M. C., op. cit., p. 629.
- (7) ラジェンドラ王による布施. 今日でも王宮の外郭で, 巡礼や貧窮者に時折食事が供される. 今日こうした社会福祉施設を伴った最大の寺院はバシュバティナート寺院である.
- (8) Regmi, M. C., op. cit., p. 823.
- (9) Regmi, M. C., op. cit., p. 828.
- (10) Regmi, M. C., op. cit., p. 828.
- (11) Regmi, M. C., Thatched Huts & Stucco Palaces -- Peasants and Landlords in 19th Century Nepal, Calcutta, 1978.
- (12) 石井溥, 『ネワール村落の社会構造とその変化 —— カースト社会の変容』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 1980.
- (13) 「総有とは『地域資源と関わりながら生活している地域住民が, 地域に居住し続けるかぎりにおいて地域資源に対して有する共同所有形態』, 熊本一規『持続的開発と生命系』, 学陽書房, 1995 年 2 月, p. 92.